

原著

恐れ型の愛着スタイルが対人場面における情動生起に及ぼす影響

直井莉央*¹ 武井祐子*² 門田昌子*² 寺崎正治*²

要 約

Bartholomew & Horowitz は、内的作業モデル (IWM) に基づいて4つの愛着スタイル (安定型・拒絶型・とらわれ型・恐れ型) に分類する2次元・4分類愛着スタイルモデルを考案した。本研究では2次元・4分類愛着スタイルモデルの2次元をふまえて自己観、他者観との一致度という観点から対人場面の設定を行い、恐れ型の愛着スタイルが対人場面における情動生起に及ぼす影響について明らかにすることを目的とし、大学生を対象に質問紙調査を行った。得られた回答を基に2要因の分散分析を行った結果、恐れ型は大きな喧嘩になる場面や友達と一緒にいるにもかかわらず1人で行う作業を割り当てられる場面においてポジティブな情動を生起しやすいことが明らかとなった。つまり、恐れ型は依存的な関係であると同時に親密性が回避されるというアンビバレントな対人関係においてポジティブな情動を生起する可能性が示された。このことから、上記のような情動生起の特徴が対人間のトラブルの原因となっている可能性が考えられた。その一方で、不安定性の強い恐れ型であっても一定の距離を他者と保つことで適応的な対人関係を構築できる可能性も示唆された。

1. 緒言

Bartholomew & Horowitz¹⁾ は、Bowlby (1973 黒田他訳 1991)²⁾ が提唱した内的作業モデル (IWM: Internal Working Models) に注目した研究を行い、自己観 (依存性) がポジティブであるかネガティブであるか、他者観 (親密性の回避) がポジティブであるかネガティブであるかにより、4つの愛着スタイルに区別されるという2次元・4分類愛着スタイルモデル (安定型・拒絶型・とらわれ型・恐れ型) を考案した。加藤³⁾ によると、自己観とは自尊感情の維持を他者からの受容に依存する程度である。つまり、自己観がポジティブであるとは自尊感情を自分自身で維持でき、外的な受容に依存する必要がないことを示す³⁾。また、加藤³⁾ によると他者観とは親密性の回避の程度である。つまり、他者観がポジティブであるとは愛着対象との親密な関係を回避しないことを示す⁴⁾。すなわち、自己観がネガティブであるとは自尊感情の維持に関して他者の受容に依存する程度が高く、他者観がネガティブであるとは親

密性の回避が高いことを示す。これらの組み合わせによって、自己観と他者観がどちらもポジティブなスタイルを安定型、自己観がポジティブ、他者観がネガティブなスタイルを拒絶型、自己観がネガティブ、他者観がポジティブなスタイルをとらわれ型、自己観と他者観がどちらもネガティブなスタイルを恐れ型として分類する (図1)。愛着スタイルの特徴をふまえると、4分類した愛着スタイルの中でも最も不安定性が強い恐れ型は対人間での問題が多く生じる可能性が考えられる。例えば、馬場⁵⁾ は青年期の愛着スタイルと被援助志向性について検討し、ネガティブな他者観を形成している恐れ型及び拒絶型は、ポジティブな他者観を形成している安定型及びとらわれ型より有意に被援助に対する肯定的態度が低いことを明らかにしている。このことから、援助を受けることを肯定的に捉えにくいという特徴を持つ恐れ型及び拒絶型は、他者を頼ることが苦手であるために安定した対人関係を築きにくい傾向があると考えられる。また、工藤⁶⁾ は P-F スタディを用い

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻
(*2021年4月以降の所属: 社会福祉法人静和会 府中むつみ園)

*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科
(連絡先) 武井祐子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-mail: takei@mw.kawasaki-m.ac.jp

て恐れ型の攻撃性について検討しており、愛着対象への攻撃性が抑圧されやすいことを示している。恐れ型は虐待や養育不足といった一貫性のない養育環境を経験している場合が多く、愛着対象を失う不安から攻撃性や主張性を制御する傾向にあることが考えられる。岡田⁷⁾によると、恐れ型は他者に頼りたい気持ちが強い一方で相手の些細な行動も自身をないがしろにしているように感じ、信じられなくなるという不安定さを持っている。つまり、他者と関わりたいという思いがありながら適切に攻撃性や主張性を表現できない恐れ型は、自身が望む対人関係を構築できていないことが考えられる。恐れ型が対人関係をどのように経験し、どのように感じているのかを明らかにすることは安定した対人関係を形成するための一助になるのではないかと考えられる。

愛着スタイルは対人場面における情動生起にも影響を及ぼすことが示されている⁸⁾。しかし、それらの研究には2つの課題が挙げられる。まず、上條ら⁸⁾はポジティブな場面として大学に合格する場面を設定しているが、個人の成功体験という要素が強く対人場面としては不十分である点である。次に、一般的にその場面がポジティブかネガティブかという観点から場面を想定しており、特徴を考慮に入れた場面設定がされていない点である⁸⁾。例えば、ネガティブな自己観を形成している恐れ型及びとらわれ型は他者から見放されることを恐れることや、依存的な関係を他者に求めるという特徴を持つ。そのため、

友達や恋人との喧嘩など一般的に対人関係におけるネガティブな場面であっても、喧嘩の最中は相手が自分のみと接しており、自分のことを考えてくれていると捉えるため、ポジティブな情動（喜びや楽しさなど）を多く生起する可能性が考えられる。反対に、ポジティブな自己観を形成している安定型及び拒絶型は上記のような場面においてネガティブな情動（苦悩や嫌悪など）を生起する可能性がある。つまり、愛着スタイルは対人関係における反応の個人差であると考えられることから、各対人場面をポジティブもしくはネガティブとする評価には愛着スタイルの特徴が影響することが推察される。すなわち、各場面がポジティブかネガティブかは愛着スタイルによって異なると考えられる。以上の課題を改善するためには愛着スタイルの特徴を考慮に入れて対人場面を設定し、多面的に情動生起について検討することが必要であると考えられる。愛着スタイルの特徴を反映させた場面設定を行うという条件を満たすためには、愛着スタイルを分類するための軸である自己観・他者観という2次元に合わせた場面設定を行うことが適切であると考えられる。各次元との一致・不一致に基づく場面設定を行い、どのような情動が生起するのかを検討することで、恐れ型の愛着スタイルの特徴に一致するあるいは一致しない場面での情動生起についての検討が可能となると推察される。以上のことから、2次元・4分類愛着スタイルモデルの2次元をふまえて自己観、他者観との一致

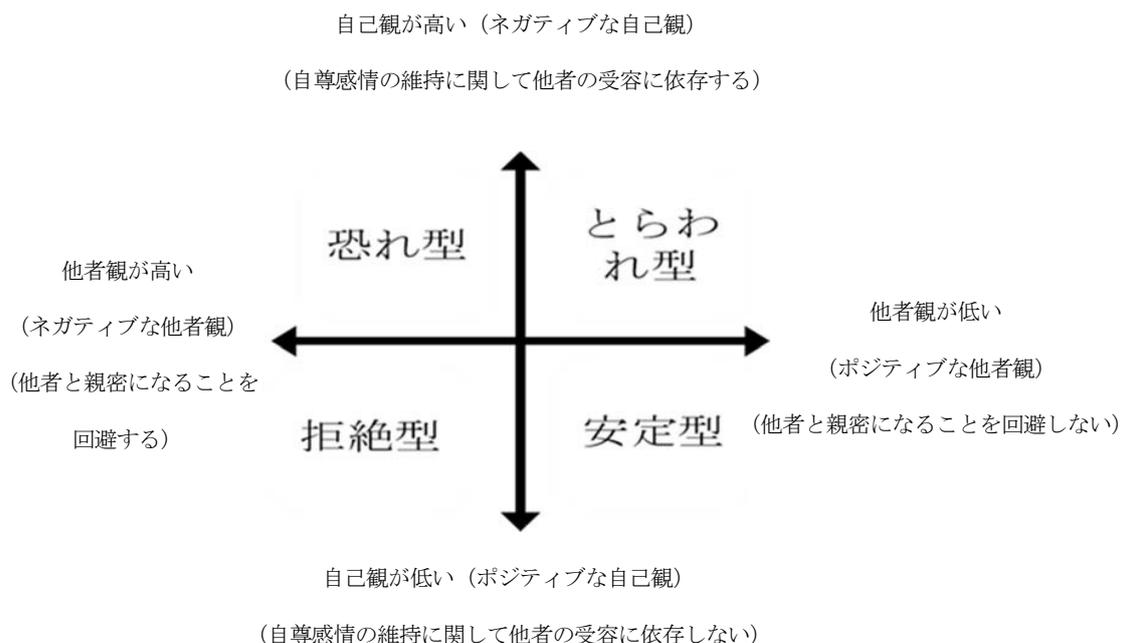


図1 愛着スタイルの4分類

度という観点から対人場面の設定を行い、恐れ型の愛着スタイルが対人場面における情動生起に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1 調査参加者

中国地方にある私立大学に通う学生160名（男性56名、女性103名、性別不明1名）を対象に質問紙調査を行った。そのうち調査参加に同意の得られなかった3名を除いた157名を調査参加者とした。平均年齢は、 19.8 ± 0.8 SD歳であった。

2.2 調査時期

調査時期は、2020年6月26日～2020年8月12日であった。

2.3 調査手続き及び倫理的配慮

質問紙調査は、講義終了後の時間を利用して実施した。質問紙の配付を行う前には、調査対象者に対して調査参加は任意であること、質問紙への回答を途中でやめることが可能であること等を口頭で説明した。質問紙の配付後、調査に参加するか否かを調査対象者に選択してもらい、質問紙のフェイスシートにあるチェック項目に記入することを求めた。質問紙調査は無記名で行われ、質問紙回答終了後、回答の有無にかかわらず配付した全ての質問紙を調査者が回収した。また、本研究は倫理委員会の承認を得て質問紙調査を行った（承認番号：20-015）。

2.4 質問紙の構成

質問紙はフェイスシート、愛着スタイルを測定する尺度「ECR-GO」⁴⁾、自己観・他者観との一致度が高い対人場面、自己観・他者観との一致度が低い対人場面を想定した8場面、各場面における情動を測定する尺度「測定簡易気分調査票日本語版(BMC-J)」⁹⁾から構成された。

愛着スタイルを測定する尺度「ECR-GO」は「見捨てられ不安(自己観)」計18項目と「親密性の回避(他者観)」計12項目の2尺度で構成されており、尺度得点が高いほどネガティブな自己観・他者観であることを示した。また、各場面における情動を測定する尺度「簡易気分調査票日本語版(BMC-J)」は「肯定的感情」計4項目と「否定的感情」計5項目の2尺度から構成された。「ECR-GO」「簡易気分調査票日本語版(BMC-J)」における回答形式は、4件法(1. まったくあてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. 少しあてはまる 4. よくあてはまる)であった。

2.5 対人場面の設定

対人場面の設定は大きく分けて以下の2点をふまえて行うこととした。まず、2次元・4分類愛着ス

タイルモデル¹⁾の2次元の特徴をふまえて場面設定を行うために、愛着スタイルを測定する尺度「ECR-GO」⁴⁾の項目を参考にした。ネガティブな自己観との一致度が高い(ポジティブな自己観との一致度が低い)場面、ネガティブな自己観との一致度が低い(ポジティブな自己観との一致度が高い)場面、ネガティブな他者観との一致度が高い(ポジティブな他者観との一致度が低い)場面、ネガティブな他者観との一致度が低い(ポジティブな他者観との一致度が高い)場面について各2場面計8場面を設定した。加えて、調査対象者である大学生が日常的に経験すると考えられる場面を設定するために、対人関係に関するライフイベント¹⁰⁾を参考にして各場面設定を行った。なお、場面の内容は心理学を専門とする大学教員3名、心理学を専攻する大学院生2名との合議により決定した。

愛着スタイルを測定する尺度である「ECR-GO」⁴⁾において「私は、1人ぼっちになってしまうのではないかと心配する」「私が入るととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう」「人にダメだなあとと言われると、自分は本当に駄目だなあと感じる」といった項目にあてはまると回答した場合、ネガティブな自己観を持つ。つまり、ネガティブな自己観を持つ人は人から見捨てられるのではないかという不安が高く他者に依存することで自尊感情を保つ傾向にあるため、不安を増大する場面を回避する傾向にあることに加え、他者と依存的な関係になれる場面を好むことが推察される。よって、場面2(あなたはご飯に誘おうと考えて友達に電話をかけると、その友達は他の人と遊んでいる様子だった。しかし、友達は「すぐに行くね」と言って、あなたに会いに来てくれた。)、場面4(あなたは友達と喧嘩になった。その理由は、あなたが他の友達と遊びに行ったことであった。友達はあなたに「自分も誘ってほしかった」「自分以外の人と遊んでほしくない」「自分のことが好きではないのか」と言い、怒りが収まらない様子だった。あなたは友達に謝ったが、なかなか許してもらえず、大きな喧嘩になってしまった。)は、ネガティブな自己観との一致度が高いと考えられる場面である。一方で、他者から否定的な態度を示される等の不安が高まる場面はネガティブな自己観を持つ人において特徴と一致していない場面である。つまり、場面1(その日、あなたは用事があるため早く家に帰らなくてはいけなかった。帰ろうとする途中にあなたにとって最も仲の良い友達があなたとは別のひとと話している場面をみてしまった。友達はとても楽しそうな様子で、その人とも仲が良さそうに

みえた.), 場面3 (あなたは最も仲の良い友達に「レポートが終わらなくて困っている」と相談した. すると, 友達から「いつもぎりぎりになってからやるからだ」「そういうところは直した方がいい」と注意されてしまった.) は, ネガティブな自己観との一致度が低いと考えられる場面である.

愛着スタイルを測定する尺度である「ECR-GO」⁴⁾において「私は, 人とあまりに親密になることがどちらかというとき好きではない」「心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというとき好きではない」「私は, 人に心を開くのに抵抗を感じる」といった項目にあてはまると回答した場合, ネガティブな他者観を持つ. つまり, ネガティブな他者観を持つ人は他者との親密性が高まる場面を回避する傾向にあると考えられ, 他者と距離を置ける関係性を好むことが推察される. よって, 場面6 (内容: あなたは友達5人と協力して, 講義の課題をしなければいけなくなった. 友達たちが, 2人ずつのグループになって作業に取り組む中で, あなたは1人で行う作業を割り当てられた.), 場面8 (あなたは友達と同じ部屋で課題をしていた. あなたはまだ課題が終わりそうになかったが, 友達は早く終わったようで「帰るね」と言って先に帰ってしまった.) は, ネガティブな他者観との一致度が高いと考えられる場面である. 一方で, 他者から頼りにされる等の親密性が高まる場面はネガティブな他者観を持つ人において特徴と一致していない場面である. つまり, 場面5 (あなたはやらなければならない課題がたくさんあったが, なかなか納得いくものができず, 課題が進まなくて悩んでいた. その様子をみた友達が「大丈夫?」「何か困ってるなら話聞くよ」と声をかけてきた.), 場面7 (あなたは友達から「恋人のことで悩んでいて…」という相談を受けた. その時にあなたならどうするか聞かれ, 「頼りにしているからアドバイスがほしい」と言われた.) は, ネガティブな他者観との一致度が低いと考えられる場面である.

2.6 データの整理と統計処理

本研究の統計処理は, 統計ソフト SPSS を用いて行われた. まず, ECR-GOの2尺度の尺度得点を求めた. 次に, 尺度得点の平均値を算出し, 尺度得点の平均値以上の得点をネガティブ群, 尺度得点の平均値未満の得点をポジティブ群として群分けを行った. 本研究では, 2次元・4分類愛着スタイルモデル¹⁾の2次元 (自己観・他者観) を独立変数, 各仮想場面における情動の得点を従属変数として2要因の分散分析を行った.

3. 結果

3.1 各場面における情動得点の平均値と標準偏差及び2要因の分散分析の主効果と交互作用

各場面における自己観 (ネガティブ群・ポジティブ群), 他者観 (ネガティブ群・ポジティブ群) の各情動得点の平均値及び標準偏差は以下の通りであった (表1). 場面1, 場面2, 場面3, 場面7では欠損値はなく, 自己観のネガティブ群 ($n=80$)・ポジティブ群 ($n=77$), 他者観のネガティブ群 ($n=68$)・ポジティブ群 ($n=89$) であった. 以下に各場面における欠損値を除外した人数を記載する. 場面4では「不愉快だ」という情動において自己観のポジティブ群 ($n=76$), 他者観のポジティブ群 ($n=88$) であった. 場面5では「怒り/敵意を感じる」という情動において自己観のネガティブ群 ($n=79$), 他者観のポジティブ群 ($n=88$) であった. 場面6では全ての情動において自己観のポジティブ群 ($n=76$), 他者観のポジティブ群 ($n=88$) であった. 場面8では全ての情動において自己観のネガティブ群 ($n=79$), 他者観のネガティブ群 ($n=67$) であった.

恐れ型の愛着スタイルが対人場面における情動生起に及ぼす影響を検討することが本研究の目的であった. よって, 愛着スタイル間での比較を行うために表1を基に有意な交互作用が認められた各場面の結果のみ詳細に記述する.

ネガティブな自己観との一致度が高いことを想定した場面4において「うれしい」「幸福である」といった情動について有意な交互作用がみられた. 「うれしい」という情動において自己観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ, 自己観のネガティブ群において他者観の単純主効果が有意であった. つまり, 自己観のネガティブ群においてネガティブな他者観 (恐れ型) である方がポジティブな他者観 (とらわれ型) であるよりも「うれしい」という情動得点が高くなることが明らかとなった. また, 他者観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ他者観のネガティブ群において自己観の単純主効果が有意であった. つまり, 他者観のネガティブ群においてネガティブな自己観 (恐れ型) である方がポジティブな自己観 (拒絶型) であるよりも「うれしい」という情動得点が高くなることが明らかとなった (図2). 「幸福である」という情動において自己観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ自己観のネガティブ群において他者観の単純主効果が有意であった. つまり, 自己観のネガティブ群においてネガティブな他者観 (恐れ型) である方がポジティブな他者観 (とらわ

表1 各場面における情動得点の平均値、標準偏差及び2要因の分散分析の主効果、交互作用

| | 自己観 他者観 | ネガティブ群 | | | | ポジティブ群 | | | | 主効果 | | |
|------------------|------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|--------|------|-----|-----|----|
| | | ネガティブ群 | | ポジティブ群 | | ネガティブ群 | | ポジティブ群 | | F値 | 他者観 | F値 |
| | | 平均値(標準偏差) | 平均値(標準偏差) | 平均値(標準偏差) | 平均値(標準偏差) | 平均値(標準偏差) | 平均値(標準偏差) | | | | | |
| 場面1 | うれしい | 2.3(0.8) | 2.0(0.7) | 2.3(0.8) | 2.4(0.9) | 2.1 | 0.2 | 1.5 | | | | |
| | イライラしている | 2.0(0.8) | 1.9(0.8) | 1.7(0.8) | 1.3(0.5) | 14.8*** | 4.5* | 0.6 | | | | |
| | 不愉快だ | 2.1(0.9) | 1.9(0.6) | 1.5(0.9) | 1.4(0.8) | 20.1*** | 2.6 | 0.0 | | | | |
| | 心地よい | 1.8(0.7) | 1.9(0.9) | 2.1(0.8) | 2.1(0.8) | 4.5* | 0.1 | 0.0 | | | | |
| | 幸福である | 1.8(0.7) | 1.8(0.9) | 2.2(0.8) | 2.1(0.8) | 9.9*** | 0.0 | 0.3 | | | | |
| | 怒り/敵意を感じる | 1.7(0.8) | 1.8(0.6) | 1.4(0.7) | 1.3(0.7) | 12.8*** | 0.4 | 0.9 | | | | |
| | 楽しい/面白い | 1.8(0.7) | 1.9(0.8) | 2.0(0.8) | 2.0(0.7) | 2.6 | 0.2 | 0.2 | | | | |
| | 気持ちが沈んでいる/憂うつである | 2.3(1.0) | 2.0(0.7) | 1.6(1.0) | 1.4(0.8) | 25.2*** | 4.1* | 0.2 | | | | |
| | なんとなく心配だ/不安だ | 2.4(1.1) | 2.3(0.8) | 1.6(1.1) | 1.6(1.0) | 24.6*** | 0.4 | 0.0 | | | | |
| | 場面2 | うれしい | 3.3(0.7) | 3.5(0.8) | 3.2(0.8) | 3.1(0.8) | 5.1* | 0.1 | 1.7 | | | |
| イライラしている | | 1.2(0.4) | 1.2(0.5) | 1.3(0.5) | 1.1(0.4) | 0.1 | 0.1 | 0.2 | | | | |
| 不愉快だ | | 1.4(0.6) | 1.2(0.5) | 1.3(0.7) | 1.2(0.4) | 0.4 | 4.1* | 0.2 | | | | |
| 心地よい | | 2.7(0.9) | 2.8(0.9) | 2.7(0.9) | 2.4(0.9) | 1.8 | 0.2 | 1.2 | | | | |
| 幸福である | | 3.0(0.8) | 3.0(0.9) | 2.9(0.9) | 2.9(0.9) | 0.7 | 0.3 | 0.0 | | | | |
| 怒り/敵意を感じる | | 1.2(0.4) | 1.2(0.4) | 1.2(0.4) | 1.1(0.4) | 0.6 | 0.1 | 0.4 | | | | |
| 楽しい/面白い | | 2.7(0.9) | 2.9(1.0) | 2.7(1.0) | 2.5(1.0) | 1.4 | 0.0 | 1.3 | | | | |
| 気持ちが沈んでいる/憂うつである | | 1.8(0.9) | 1.7(0.8) | 1.4(0.9) | 1.5(0.8) | 3.7 | 0.0 | 0.1 | | | | |
| なんとなく心配だ/不安だ | | 2.6(1.1) | 2.4(1.1) | 2.2(1.1) | 2.2(1.0) | 4.4* | 0.6 | 0.6 | | | | |
| 場面3 | | うれしい | 1.8(0.8) | 1.7(0.8) | 1.8(0.8) | 1.9(0.8) | 0.5 | 0.1 | 0.6 | | | |
| | イライラしている | 2.5(1.0) | 2.3(0.8) | 2.1(1.0) | 1.6(1.0) | 13.8*** | 5.1* | 1.0 | | | | |
| | 不愉快だ | 2.4(1.0) | 2.3(0.9) | 2.1(1.0) | 1.6(0.9) | 9.2** | 3.9* | 1.1 | | | | |
| | 心地よい | 1.6(0.7) | 1.5(0.8) | 1.7(0.7) | 1.7(0.7) | 1.1 | 0.0 | 0.2 | | | | |
| | 幸福である | 1.8(0.8) | 1.6(0.9) | 1.7(0.9) | 1.7(0.8) | 0.0 | 0.2 | 0.7 | | | | |
| | 怒り/敵意を感じる | 2.3(1.0) | 1.9(0.7) | 1.7(1.0) | 1.5(0.9) | 11.7** | 3.7 | 0.1 | | | | |
| | 楽しい/面白い | 1.4(0.6) | 1.4(0.6) | 1.4(0.6) | 1.5(0.6) | 0.4 | 0.7 | 0.9 | | | | |
| | 気持ちが沈んでいる/憂うつである | 2.7(0.9) | 2.8(1.0) | 2.4(1.0) | 1.9(1.0) | 14.6*** | 1.5 | 4.3* | | | | |
| | なんとなく心配だ/不安だ | 2.6(1.1) | 2.6(1.0) | 2.1(0.9) | 1.8(1.0) | 16.2** | 1.2 | 0.7 | | | | |
| | 場面4 | うれしい | 1.7(0.8) | 1.3(0.5) | 1.2(0.8) | 1.2(0.5) | 6.2* | 2.2 | 4.1* | | | |
| イライラしている | | 3.0(0.9) | 3.0(1.0) | 2.9(0.9) | 2.8(1.0) | 1.2 | 0.2 | 0.3 | | | | |
| 不愉快だ | | 3.0(1.0) | 3.0(0.9) | 3.1(0.9) | 3.0(0.9) | 0.2 | 0.0 | 0.1 | | | | |
| 心地よい | | 1.6(0.7) | 1.4(0.5) | 1.2(0.7) | 1.2(0.6) | 7.8** | 0.4 | 1.8 | | | | |
| 幸福である | | 1.8(0.8) | 1.4(0.5) | 1.1(0.8) | 1.2(0.6) | 19.3*** | 1.3 | 5.4* | | | | |
| 怒り/敵意を感じる | | 2.5(0.9) | 2.5(0.1) | 2.6(1.0) | 2.4(1.0) | 0.0 | 0.5 | 0.2 | | | | |
| 楽しい/面白い | | 1.5(0.6) | 1.2(0.4) | 1.2(0.7) | 1.2(0.4) | 4.9* | 2.0 | 2.0 | | | | |
| 気持ちが沈んでいる/憂うつである | | 2.7(1.0) | 2.7(1.1) | 2.5(1.0) | 2.4(1.1) | 2.1 | 0.1 | 0.2 | | | | |
| なんとなく心配だ/不安だ | | 2.8(1.0) | 2.8(1.2) | 2.3(1.1) | 2.5(0.1) | 6.0* | 0.5 | 0.2 | | | | |
| 場面5 | | うれしい | 3.6(0.6) | 3.7(0.6) | 3.5(0.6) | 3.6(0.6) | 0.1 | 1.0 | 0.0 | | | |
| | イライラしている | 1.7(0.7) | 1.5(0.7) | 1.3(0.7) | 1.3(0.7) | 4.8* | 1.0 | 0.8 | | | | |
| | 不愉快だ | 1.4(0.7) | 1.3(0.6) | 1.5(0.8) | 1.1(0.5) | 0.5 | 6.0* | 1.5 | | | | |
| | 心地よい | 3.0(0.8) | 3.1(0.9) | 3.1(0.8) | 2.9(0.9) | 0.2 | 0.0 | 1.9 | | | | |
| | 幸福である | 3.1(0.8) | 3.3(0.9) | 3.0(0.9) | 3.0(0.8) | 3.2 | 0.9 | 0.5 | | | | |
| | 怒り/敵意を感じる | 1.2(0.5) | 1.3(0.4) | 1.2(0.4) | 1.1(0.5) | 2.1 | 0.1 | 1.0 | | | | |
| | 楽しい/面白い | 2.0(0.9) | 2.0(0.9) | 2.2(0.9) | 1.8(0.9) | 0.1 | 1.2 | 2.6 | | | | |
| | 気持ちが沈んでいる/憂うつである | 2.1(1.0) | 1.7(0.9) | 1.8(1.0) | 1.6(0.9) | 2.4 | 3.6 | 0.5 | | | | |
| | なんとなく心配だ/不安だ | 2.1(1.0) | 1.8(0.8) | 1.8(1.0) | 1.5(0.8) | 2.8 | 5.3* | 0.0 | | | | |
| | 場面6 | うれしい | 1.8(0.8) | 1.6(0.7) | 1.5(0.8) | 1.7(0.7) | 0.5 | 0.3 | 2.7 | | | |
| イライラしている | | 2.0(0.9) | 2.1(0.8) | 2.0(1.0) | 1.5(0.8) | 3.1 | 1.7 | 4.7* | | | | |
| 不愉快だ | | 2.5(0.9) | 2.6(0.9) | 1.9(1.1) | 1.8(0.9) | 19.1*** | 0.0 | 0.6 | | | | |
| 心地よい | | 1.9(0.9) | 1.6(0.6) | 1.5(0.9) | 1.5(0.7) | 3.9* | 1.5 | 1.5 | | | | |
| 幸福である | | 1.7(0.6) | 1.4(0.6) | 1.3(0.6) | 1.4(0.6) | 2.6 | 0.7 | 4.3* | | | | |
| 怒り/敵意を感じる | | 2.0(0.9) | 2.1(0.8) | 1.8(1.0) | 1.5(0.9) | 7.9** | 0.6 | 2.3 | | | | |
| 楽しい/面白い | | 1.8(0.8) | 1.5(0.6) | 1.2(0.8) | 1.5(0.6) | 7.6** | 0.0 | 6.5* | | | | |
| 気持ちが沈んでいる/憂うつである | | 2.6(1.0) | 3.0(1.0) | 2.6(1.1) | 2.0(1.1) | 7.3** | 0.6 | 8.8** | | | | |
| なんとなく心配だ/不安だ | | 3.1(1.0) | 3.2(1.1) | 2.4(1.1) | 2.4(1.1) | 21.1*** | 0.1 | 0.1 | | | | |
| 場面7 | | うれしい | 3.1(0.9) | 3.4(0.8) | 3.0(1.0) | 3.2(0.7) | 0.8 | 4.5* | 0.0 | | | |
| | イライラしている | 1.4(0.6) | 1.3(0.5) | 1.3(0.6) | 1.1(0.5) | 2.7 | 2.7 | 0.1 | | | | |
| | 不愉快だ | 1.4(0.6) | 1.3(0.5) | 1.4(0.6) | 1.2(0.5) | 0.7 | 3.1 | 0.5 | | | | |
| | 心地よい | 2.5(1.0) | 2.6(1.0) | 2.4(1.1) | 2.4(1.0) | 0.4 | 0.1 | 0.1 | | | | |
| | 幸福である | 2.5(1.0) | 2.4(1.1) | 2.3(1.1) | 2.4(1.0) | 0.3 | 0.0 | 0.1 | | | | |
| | 怒り/敵意を感じる | 1.4(0.6) | 1.2(0.5) | 1.3(0.7) | 1.2(0.4) | 1.3 | 3.6 | 1.2 | | | | |
| | 楽しい/面白い | 2.2(1.0) | 2.4(1.1) | 2.1(1.0) | 2.2(1.0) | 0.7 | 0.6 | 0.2 | | | | |
| | 気持ちが沈んでいる/憂うつである | 1.6(0.7) | 1.4(0.6) | 1.5(0.8) | 1.1(0.6) | 3.3 | 7.6** | 1.1 | | | | |
| | なんとなく心配だ/不安だ | 2.4(1.0) | 1.8(0.9) | 1.8(1.0) | 1.6(0.9) | 6.1* | 6.2* | 1.4 | | | | |
| | 場面8 | うれしい | 1.4(0.6) | 1.5(0.6) | 1.5(0.5) | 1.5(0.6) | 1.1 | 0.1 | 0.4 | | | |
| イライラしている | | 2.2(0.9) | 2.1(0.9) | 1.9(1.0) | 1.6(0.9) | 5.9* | 2.4 | 0.2 | | | | |
| 不愉快だ | | 2.5(1.0) | 2.2(0.9) | 2.0(1.0) | 1.6(0.9) | 13.6*** | 5.6* | 0.7 | | | | |
| 心地よい | | 1.3(0.6) | 1.4(0.6) | 1.3(0.5) | 1.4(0.6) | 0.1 | 0.4 | 0.1 | | | | |
| 幸福である | | 1.4(0.5) | 1.3(0.5) | 1.4(0.5) | 1.2(0.5) | 0.2 | 1.3 | 0.2 | | | | |
| 怒り/敵意を感じる | | 2.0(1.0) | 1.9(0.8) | 1.6(1.0) | 1.6(0.9) | 6.9** | 0.4 | 0.3 | | | | |
| 楽しい/面白い | | 1.3(0.5) | 1.3(0.4) | 1.2(0.4) | 1.2(0.5) | 0.6 | 0.0 | 0.0 | | | | |
| 気持ちが沈んでいる/憂うつである | | 2.9(1.0) | 2.8(1.1) | 2.5(1.0) | 1.9(1.2) | 16.6*** | 3.9* | 1.5 | | | | |
| なんとなく心配だ/不安だ | | 2.7(1.0) | 2.5(1.1) | 2.3(1.1) | 2.0(1.1) | 8.6** | 1.6 | 0.1 | | | | |

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

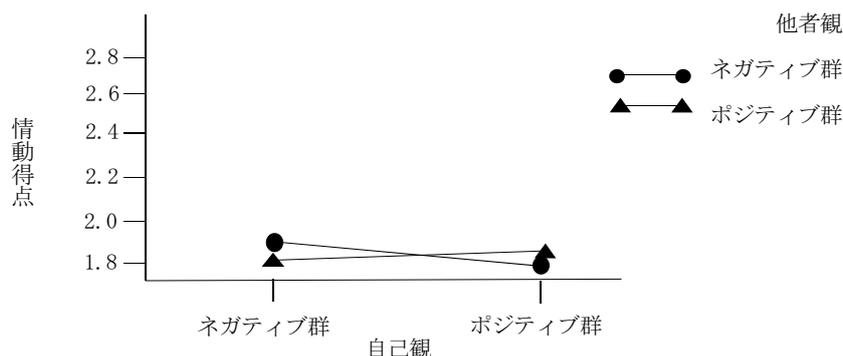


図2 場面4の各群における「うれしい」の情動得点の平均値

れ型)であるよりも「幸福である」という情動得点が高くなることが明らかとなった。また、他者観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ他者観のネガティブ群において自己観の単純主効果が有意であった。つまり、他者観のネガティブ群においてネガティブな自己観(恐れ型)である方がポジティブな自己観(拒絶型)であるよりも「幸福である」という情動得点が高くなることが明らかとなった。「うれしい」という情動と同様の結果であるために図は省略する。

ネガティブな自己観との一致度が低いことを想定した場面3において「気持ちが沈んでいる/憂うつである」という情動について有意な交互作用がみられた。自己観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、自己観のポジティブ群において他者観の単純主効果が有意であった。つまり、自己観のポジティブ群においてネガティブな他者観(拒絶型)である方がポジティブな他者観(安定型)であるよりも「気持ちが沈んでいる/憂うつである」という情動得点が高くなることが明らかとなった。また、他者観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、他者観のポジティブ群において自己観の単純主効果が有意であった。つまり、他者観のポジティブ群においてネガティブな自己観(とらわれ型)である方がポジティブな自己観(安定型)であるよりも「気持ちが沈んでいる/憂うつである」という情動得点が高くなることが明らかとなった(図3)。

ネガティブな他者観との一致度が高いことを想定した場面6において、「幸福である」「楽しい/面白い」「イライラしている」「気持ちが沈んでいる/憂うつである」といった情動について有意な交互作用がみられた。「幸福である」という情動において自己観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、自己観のネガティブ群において他者観の

単純主効果が有意であった。つまり、自己観のネガティブ群においてネガティブな他者観(恐れ型)である方がポジティブな他者観(とらわれ型)であるよりも「幸福である」という情動得点が高くなることが明らかとなった。また、他者観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、他者観のネガティブ群において自己観の単純主効果が有意であった。つまり、他者観のネガティブ群においてネガティブな自己観(恐れ型)である方がポジティブな自己観(拒絶型)であるよりも「幸福である」という情動得点が高くなることが明らかとなった。「楽しい/面白い」という情動において他者観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、他者観のネガティブ群において自己観の単純主効果が有意であった。つまり、他者観のネガティブ群においてネガティブな自己観(恐れ型)である方がポジティブな自己観(拒絶型)であるよりも「楽しい/面白い」という情動得点が高くなることが明らかとなった。「イライラしている」という情動において自己観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、自己観のポジティブ群において他者観の単純主効果が有意であった。つまり、自己観のポジティブ群においてネガティブな他者観(拒絶型)である方がポジティブな他者観(安定型)であるよりも「イライラしている」という情動得点が高くなることが明らかとなった。また、他者観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、他者観のポジティブ群において自己観の単純主効果が有意であった。つまり、他者観のポジティブ群においてネガティブな自己観(とらわれ型)である方がポジティブな自己観(安定型)であるよりも「イライラしている」という情動得点が高くなることが明らかとなった。「気持ちが沈んでいる/憂うつである」という情動において自己観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、自己観のポジティブ

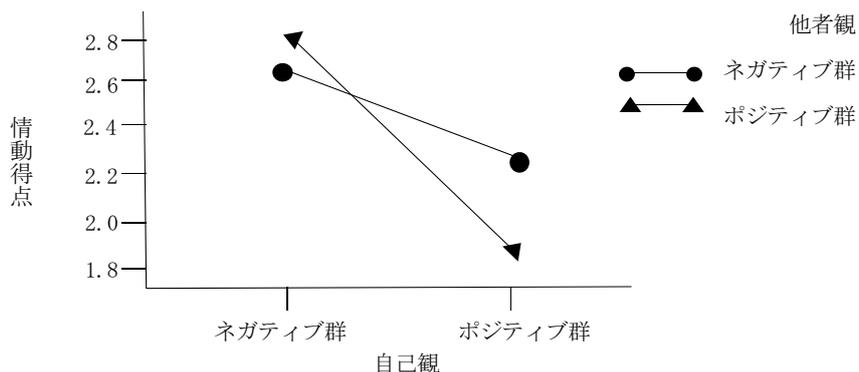


図3 場面3の各群における「気持ちが沈んでいる / 憂うつである」の情動得点の平均値

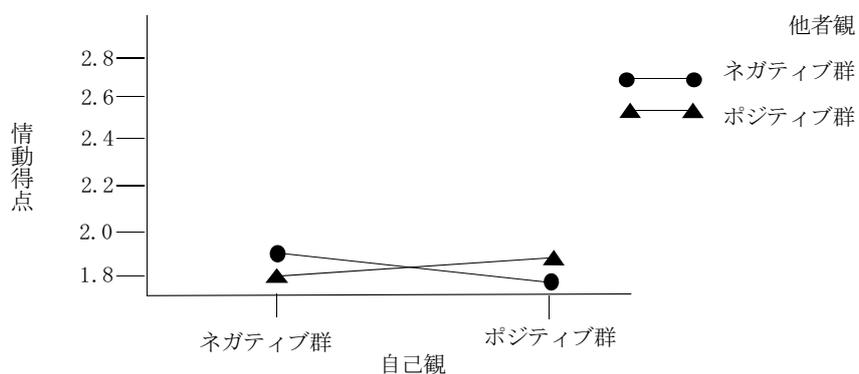


図4 場面6の各群における「幸福である」の情動得点の平均値

表2 各場面における愛着スタイルごとの情動得点の比較

| 場面 | | 交互作用の有無 | 情動の種類 | 愛着スタイル |
|------------------------------|------------------------------------|---------|------------------------------|--------------------------|
| ネガティブな自己観との一致度が高いことを想定した対人場面 | 場面2 (友達に電話をしたらすぐに会いに来てくれた) | なし | なし | なし |
| | 場面4 (友達と大きな喧嘩になってしまった) | あり | 「うれしい」「幸福である」 | 恐れ型>拒絶型・とらわれ型 |
| ネガティブな自己観との一致度が低いことを想定した対人場面 | 場面1 (友達が他の人と仲良くしている場面に遭遇した) | なし | なし | なし |
| | 場面3 (相談したら友達から注意を受けた) | あり | 「気持ちが沈んでいる/憂うつである」 | 拒絶型・とらわれ型>安定型 |
| ネガティブな他者観との一致度が高いことを想定した対人場面 | 場面6 (友達と協力して課題をする場面で1人の作業を割り当てられた) | あり | 「気持ちが沈んでいる/憂うつである」「イライラしている」 | 拒絶型・とらわれ型>安定型 |
| | | | 「幸福である」「楽しい/面白い」 | 恐れ型>拒絶型・とらわれ型 恐れ型>拒絶型 |
| | 場面8 (同じ部屋で課題をしていた友達が先に帰ってしまった) | なし | なし | なし |
| ネガティブな他者観との一致度が低いことを想定した対人場面 | 場面5 (友達が心配して声をかけてくれた) | なし | なし | なし |
| | 場面7 (友達から相談を受けてアドバイスを求められた) | なし | なし | なし |

ブ群において他者観の単純主効果が有意であった。つまり、自己観のポジティブ群においてネガティブな他者観（拒絶型）である方がポジティブな他者観（安定型）であるよりも「気持ちが沈んでいる / 憂うつである」という情動得点が高くなることが明らかとなった。また、他者観の要因の各水準において単純主効果検定を行ったところ、他者観のポジティブ群において自己観の単純主効果が有意であった。

つまり、他者観のポジティブ群においてネガティブな自己観（とらわれ型）である方がポジティブな自己観（安定型）であるよりも「気持ちが沈んでいる / 憂うつである」という情動得点が高くなることが明らかとなった。交互作用のあった4つの情動の中で代表的な結果として「幸福である」という情動における図を示す（図4）。

一方で、場面4と同様にネガティブな自己観との

一致度が高いことを想定した場面2, 場面3と同様にネガティブな自己観との一致度が低いことを想定した場面1, 場面6と同様にネガティブな他者観との一致度が高いことを想定した場面8において有意な交互作用はみられなかった。また, ネガティブな他者観との一致度が低いことを想定した場面5, 場面7においてはどちらも有意な交互作用はみられなかった(表2)。

4. 考察

本研究の目的は2次元・4分類愛着スタイルモデルの2次元をふまえて自己観, 他者観との一致度という観点から対人場面の設定を行い, 恐れ型の愛着スタイルが対人場面における情動生起に及ぼす影響について明らかにすることであった。

まず, 恐れ型の愛着スタイルと情動生起の関連性について考察する。ネガティブな自己観との一致度が高いことを想定した場面4において恐れ型はとらわれ型及び拒絶型よりも「うれしい」「幸福である」といった情動をより強く生起することが明らかとなった。場面4は他の友達と遊びに行ったために友達と喧嘩になるという場面であった。恐れ型はネガティブな自己観・他者観を持つ不安定性の強い愛着スタイルである。そのため, 人に依存したいが親密になると距離を置いてしまうというジレンマを抱えている⁵⁾。自分以外と遊びに行きたくないと相手に言われ, 他者に必要以上に自身を求められるという強い依存が可能な状態である一方で, 大きな喧嘩となり他者との親密性が回避されるという両面性を持つ場面4は, 恐れ型の特徴と一致していたため「うれしい」「幸福である」といった情動をより生起したことが考えられる。加えて, 恐れ型の不安定性は養育者との関係において深く傷ついた体験に由来していることが多い⁵⁾。つまり, 一見すると否定的で傷つくような他者との関りであっても自身への関心として受け取ってしまうことで不安定性が高まる可能性が考えられる。すなわち, 場面4の喧嘩のように攻撃性の高い場面であっても他者が「自分のことだけを考えてくれる」「必要としてくれている」と考え, 肯定的に捉えたことが推察される。一方で, 場面2では恐れ型における特徴的な情動生起は認められなかった。場面2は友達が他の人よりも自身を優先してくれるという場面であり, 他者との依存度が高い状況である。つまり, 他者との依存という点においては恐れ型の特徴と一致しているが, 他者との親密性が回避される場面ではなく, 場面4のように両面性のある状況ではないことが推察される。そのため, 恐れ型の特徴的な情動生起がみられなかつ

たと考えられる。

また, ネガティブな他者観との一致度が高いことを想定した場面6において恐れ型は拒絶型及びとらわれ型よりも「幸福である」という情動を生起することが明らかとなった。加えて, 「楽しい/面白い」といった情動においても恐れ型は拒絶型よりも強く情動を生起することが示された。場面6は友達と協力して課題をする際に1人で行う作業を割り当てられる場面であった。先述したように恐れ型は他者に依存したいが親密になると距離を置いてしまうというジレンマを抱えている。そのため, 友達と協力する(依存性)一方で作業は1人で行う(親密性の回避)という両面性を持つ場面6は, 恐れ型の特徴と一致しており「幸福である」「楽しい/面白い」といった情動を生起したことが考えられる。恐れ型と拒絶型はともにネガティブな他者観を持つ愛着スタイルであるが, 生起する情動が異なることが示唆された。加えて, 場面6はネガティブな他者観との一致度が高いことを想定した場面であり, 恐れ型では好ましい場面としての情動の生起がみられる一方で, 拒絶型では好ましくない場面としての情動が生起している。恐れ型と拒絶型は自己観がポジティブであるかネガティブであるかという点が異なる愛着スタイルである。つまり, 恐れ型が完全に親密性を回避するわけではなく親密になりたいがなれないという特徴である一方で, 拒絶型は他者との親密性が高まることに煩わしさを感じるといえる。すなわち, 自己観の高さが両極端となる恐れ型と拒絶型では, 場面6における認知が異なるため情動生起が相反するものになったと推察される。一方で, 場面8では恐れ型における特徴的な情動生起は認められなかった。場面8は友達が先に帰るといふ親密性が回避される場面である。つまり, 親密さが回避されるという点においては恐れ型の特徴と一致しているが, 他者と強く依存する場面ではなく, 場面6のように両面性のある状況ではないことが推察される。そのため, 恐れ型の特徴的な情動生起がみられなかったと考えられる。

次に, 恐れ型における対人関係の特徴について考察する。本研究の結果から場面4・場面6は, 恐れ型の愛着スタイルの特徴に一致する場面であったことが考えられる。両場面とも特徴に一致するものではあるが, 各場面の持つ意味は異なると考えられる。場面4は友達と大きな喧嘩になってしまう場面であり, 対人関係において危機的な状況であることが推察される。このような場面において他の愛着スタイルよりもポジティブな情動を生起してしまう恐れ型は対人間のトラブルへと発展する可能性が高いこと

が考えられる。場面4でポジティブな情動を生起した背景には、恐れ型がネガティブな情動を抑圧する対処方法をとることが影響していると考えられる。例えば、安定型の愛着スタイルを持つ人は情動を適切に表出することで対人関係を築くことが可能となる。しかし、ネガティブな情動を抑圧し対処する恐れ型は、攻撃的な場面や相手から傷つけられる場面であってもポジティブな情動を生起してしまうためにその場に適していない情動を相手に向けてしまう可能性がある。その結果、他者と衝突する頻度が高くなり、安定した対人関係の構築が困難になることが推察される。一方で、場面6は友達と課題に取り組む中で1人の作業を行うことになる場面であり、対人関係における危機的な状況であるとは考えにくい。このような場面でネガティブな情動を強く生起するのではなく、ポジティブな情動を生起していることは対人関係における恐れ型の強みであると考えられる。鳥居ら¹¹⁾は、「一人でいられる能力 (CBA: the capacity to be alone)」を行動面から検討するために「一人行動に対する不安耐性」尺度を作成し、愛着スタイルとの関連性を検討している。その結果、恐れ型は安定型及びとらわれ型よりも1人の状況を快適だと感じ、1人になることを好むことが明らかとなった。このことから、恐れ型は場面6のような他者との距離を置ける状況において心地よいと感じ、過度に友達に依存することなく対処できることが推察される。つまり、恐れ型は一定の距離を他者と保ちつつ関わりを持つことで適応的に対人関係を築くことができると推察され、対人間でのトラブルを回避することができる可能性があると考えられる。

また、工藤⁷⁾は恐れ型であってもある一定の水準を持っており、一概に病的であるといえないことを述べている。岡田¹²⁾は恐れ型の対人関係について親しくなるまでのハードルは高いが、相手の疑いのない誠意を前にすると次第に心を開き、親密な関係を築くことが可能であることを指摘している。加えて、愛着スタイルの特徴から恐れ型は同様にネガティブな他者観を持つ拒絶型よりも他者との関係性を構築

しやすいといえる¹²⁾。これらのことから、不安定性の強い恐れ型の愛着スタイルを持つとしても対人関係を築くことができないほどに病的な側面が強いとは限らず、自身の特徴の1つとして活かすことが可能であると推察される。そのため、先述した恐れ型の特徴を自身を知るだけでなく、恐れ型の人と接する家族や友人等が理解することでより安定した対人関係を構築することを促すのではないかと推察する。

5. 今後の課題と展望

本研究では対人場面を設定し、愛着スタイルが対人場面における情動生起に及ぼす影響について検討を行った。本研究において着目した恐れ型は、依存的な関係であると同時に親密性が回避されるというアンビバレントな対人関係において特徴的な情動を生起することが示された。そのような不安定な対人関係においてポジティブな情動を生起しやすい恐れ型は、対人間での問題を生じやすいことが推察される。そのため、自身の愛着スタイルの特徴を理解することが対人間における問題の対処に繋がるのではないかと期待されるが、本研究では検討ができていない。今後、自身の愛着スタイルを理解することが対人的問題の対処法の1つとなり得るかを明らかにする研究が必要である。また、本研究では場面想定法を用いており、実際の経験頻度については検討できていない。例えば、恐れ型のように人に依存したいが親密になると距離を置く特徴を持つ場合、実際の生活では依存できない場面や親密になる場面を回避するため、経験が少ない可能性がある。すなわち、愛着スタイルによって対人場面の経験頻度が異なることが推察される。実際の経験頻度を考慮に入れた研究を行うことで各愛着スタイルと情動生起との関連をより詳細に検討できると考えられる。加えて、今後の調査で新たに場面設定を行う際には予備調査を実施し、信頼性や妥当性を高めていくことも課題であるといえる。

文 献

- 1) Bartholomew K and Horowitz LM: Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244, 1991.
- 2) Bowlby J: Attachment and Loss Vol.2 Separation Anxiety and anger. The Hogarth Press, London, 1973 (黒田実郎, 岡田洋子, 吉田恒子 (訳): 母子関係の理論 新版 (2) 分離不安. 岩崎学術出版社, 東京, 1991).
- 3) 加藤和生: Bartholomew らの4分類愛着スタイル尺度 (RQ) の日本語版の作成. 認知・体験過程研究, 7, 41-50, 1998.
- 4) 中尾達馬, 加藤和生: 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. 九州大学心理学研究, 5, 19-27, 2004.

- 5) 馬場康宏：青年期の愛着スタイルと被援助志向性. 東京成徳短期大学紀要, 48, 47-54, 2015.
- 6) 工藤晋平：おそれ型の愛着スタイルにおける攻撃性の抑圧—P-F スタディを用いた検討—. パーソナリティ研究, 14, 161-170, 2006.
- 7) 岡田尊司：愛着障害—子ども時代を引きずる人々—. 光文社, 東京, 2011.
- 8) 上條真美, 岡島泰三, 桂田恵美子：青年期の愛着スタイルと情動生起の関連性について. 関西学院大学心理科学研究, 39, 31-36, 2013.
- 9) 田中健吾：簡易気分調査票日本語版 (BMC-J) の信頼性および妥当性の検討. 大阪経大論集, 58(7), 271-275, 2008.
- 10) 高比良美詠子：対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討. 社会心理学研究, 141, 2-24, 1998.
- 11) 鳥居瑤子, 岡島泰三, 桂田恵美子：大学生の一人でいられる能力と愛着スタイルとの関連—「一人行動に対する不安耐性」尺度の作成—. 臨床教育心理学研究, 37, 33-39, 2011.
- 12) 岡田尊司：愛着障害の克服—「愛着アプローチ」で, 人は変わる—. 光文社, 東京, 2016.

(2021年6月7日受理)

Effects of Fearful Attachment Style on Emotional Activation in Interpersonal Situations

Rio NAOI, Yuko TAKEI, Masako KADOTA and Masaharu TERASAKI

(Accepted Jun. 7, 2021)

Key words : attachment style, interpersonal situation, emotional arousal

Abstract

The two-dimensional, four-category attachment style model classifies attachment into four styles based on the internal working model: Secure, Dismissing, Preoccupied, and Fearful. The fearful attachment style is the most volatile style, with a negative view of the self and others leading to many interpersonal problems. Therefore, clarifying frightening experiences and feelings about interpersonal relationships could help people develop stable interpersonal relationships. The purpose of this study was to clarify the effects of fearful attachment styles on emotional arousal in interpersonal situations. A questionnaire survey was administered to university students. The results indicated that fearful attachment styles generated characteristic emotions in two-sided situations in which dependence and avoidance of intimacy were intensified.

Correspondence to : Yuko TAKEI

Department of Clinical Psychology
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan
E-mail : takei@mw.kawasaki-m.ac.jp
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.31, No.1, 2021 81-90)